



漢方医学教育 SYMPOSIUM 2023

2023年2月11日(土) 15:00~18:00

都市センターホテル

【Web同時配信】

一般財団法人 日本漢方医学教育振興財団
評議員・理事・監事

【評議員】

評議員	佐藤 達夫	東京医科歯科大学 名誉教授 東京有明医療大学 名誉学長
評議員	久保 千春	中村学園大学 学長 前 九州大学 総長
評議員	中谷 晴昭	千葉大学 理事・副学長
評議員	今井 裕	調布駅前画像診断クリニック 名誉院長 東海大学 名誉教授
評議員	河野 陽一	地方独立行政法人 東金九十九里地域医療センター 理事長
評議員	久光 正	昭和大学 学長
評議員	町田 吉夫	日本漢方生薬製剤協会 常務理事

【理事】

理事長	伴 信太郎	中津川市地域総合医療センター センター長 愛知医科大学 特命教育教授 名古屋大学 名誉教授
専務理事	松村 明	茨城県立医療大学 学長 筑波大学 名誉教授
常務理事	三瀨 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 教授
理事	北村 聖	公益社団法人 地域医療振興協会 顧問 東京大学 名誉教授
理事	田妻 進	JA尾道総合病院 病院長 広島大学客員教授・名誉教授
理事	小西 郁生	国立病院機構京都医療センター 名誉院長 京都大学 名誉教授
理事	林 純	九州大学 名誉教授 日本病院総合診療医学会 名誉理事長・最高顧問
理事	渡辺 毅	東京北医療センター 総合内科 顧問 福島労災病院 名誉院長 福島県立医科大学 名誉教授
理事	岩瀬 鎮男	東京大学医学部附属病院 病院長補佐・事務部長
理事	木村 容子	東京女子医科大学附属東洋医学研究所 所長・教授
理事	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
理事	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
理事	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
理事	濱口 眞輔	獨協医科大学 麻酔科学講座 主任教授
理事	及川 哲郎	東京医科大学 総合診療医学分野 教授 東京医科大学病院 漢方医学センター センター長
理事	遠藤 浩司	株式会社ツムラ 執行役員

【監事】

監事	永沢 徹	永沢総合法律事務所 代表弁護士
監事	小澁 高清	小澁公認会計士・税理士事務所 代表

研究助成選考委員会・委員

委員長 (理事)	瀬尾 宏美	高知大学医学部附属病院 総合診療部 教授
委員 (理事)	柴原 直利	富山大学和漢医薬学総合研究所 和漢医薬教育研修センター 教授
委員	長谷川 仁志	秋田大学 大学院医学系研究科医学教育学講座 教授
委員	山脇 正永	東京医科歯科大学 大学院医歯学総合研究科 臨床医学教育開発学分野 教授
委員	平出 敦	京都橘大学 教授 健康科学部 救急救命学科
委員	小林 直人	愛媛大学大学院医学系研究科 医学教育学講座 教授 医学部附属総合医学教育センター長・副学長(評価)
委員	喜多 敏明	辻仲病院 柏の葉 漢方未病治療センター センター長
委員	伊野 美幸	聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門医学教育研究分野 主任教授 聖マリアンナ医科大学 総合教育センター センター長
委員	小松 弘幸	宮崎大学医学部 医療人育成推進センター 臨床医学教育部門 教授 宮崎大学医学部附属病院 卒後臨床研修センター センター長
委員	間宮 敬子	信州大学医学部附属病院 信州がんセンター緩和部門 教授

教材委員会・委員

委員長 (常務理事)	三瀨 忠道	福島県立医科大学会津医療センター 漢方医学講座 教授
委員 (理事)	蓮沼 直子	広島大学大学院医系科学研究科医学教育学 教授 広島大学医学部附属医学教育センター センター長
委員	新井 信	東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授
委員	高山 真	東北大学大学院医学系研究科 漢方・統合医療学共同研究講座 特命教授
委員	網谷 真理恵	鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 地域医療学分野 准教授

(順不同・敬称略)

<2023年2月1日現在>

漢方医学教育 SYMPOSIUM 2023 プログラム

シンポジウム

15:00 - 18:00

■開会のあいさつ

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

■表彰式<研究助成・業績表彰> 15:05 - 15:20

日本漢方医学教育振興財団 理事長 伴 信太郎

2022年度採択者・受賞者表彰

■受賞講演 15:20 - 15:50

座長: 日本漢方医学教育振興財団 専務理事 松村 明
日本漢方医学教育振興財団 常務理事 三瀧 忠道

功労賞

北里大学における漢方医学教育の実際

北里大学 名誉教授
東洋医学総合研究所 名誉所長 花輪 壽彦

■パネルディスカッションⅠ 16:00 - 16:50

座長: 日本漢方医学教育振興財団 理事 北村 聖
日本漢方医学教育振興財団 理事 瀬尾 宏美
(選考委員会・委員長)

卒前教育における ICT活用の在り方

パネリスト: 研究助成最終報告者※

■パネルディスカッションⅡ 16:50 - 17:40

座長: 日本漢方医学教育振興財団 理事 渡辺 毅
日本漢方医学教育振興財団 理事 柴原 直利
(選考委員会・委員)

初期研修医に対する漢方教育の在り方

パネリスト: 研究助成最終報告者※

■教材委員会報告 17:40 - 17:55

座長: 日本漢方医学教育振興財団 常務理事 三瀧 忠道
(教材委員会・委員長)

教材・e-learning推進事業の紹介

日本漢方医学教育振興財団 教材委員会・委員 新井 信

■閉会のあいさつ

日本漢方医学教育振興財団 評議員 中谷 晴昭

【オンデマンド配信】漢方医学教育研究助成最終報告口演
＜2023年2月1日～2023年4月30日＞

2018年度

＜一般研究＞

「横浜市立大学初期研修医を対象にした、漢方 e-learning の活用による、
漢方・東洋医学の教育効果・有効性の検討」

横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 准教授 石上 友章

2019年度

＜一般研究＞

「専門医の経験知に基づく VR 漢方医学的診察教材の開発と検証」

富山大学学術研究部医学系成人看護学 I 講座 准教授 山田 理絵

「症候別アルゴリズムを用いた漢方医学教育ツールの開発」

筑波大学 医学医療系 教授 前野 哲博

「女性ヘルスケアを対象とした漢方卒業教育カリキュラム作成」

近畿大学 東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓

「東洋医学サークル学生が主体となるアクティブラーニングを用いた漢方医学教育法の開発」

大分大学医学部 医学教育センター 教授 中川 幹子

「臨床研修医コミュニケーション能力に対する漢方医学研修の効果」

広島大学病院 漢方診療センター 教授 小川 恵子

「漢方薬の薬理学的特性を理解するための学生実習の構築」

杏林大学医学部 薬理学教室 教授 櫻井 裕之

＜グループ研究＞

「病院間連携による卒業漢方教育への e-learning の導入」

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授 新井 信

2020年度

＜一般研究＞

「バーチャルリアリティ技術を応用した腹診学習コンテンツの作成と実践」

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授 野上 達也

「クラウド型教育支援サービスによる均一化された漢方教育の拡充」

旭川医科大学産婦人科学講座 教授 加藤 育民

「漢方医学に対する多職種連携教育システムの構築」

大阪医科薬科大学医学教育センター 講師（副センター長） 駒澤 伸泰

「医学部学生用動画教材の作製とそれを用いた多学部合同実習の設計」

岩手医科大学医学部医学教育学講座 医学教育学分野 特任講師 相澤 純

＜グループ研究＞

「Web投票を活用した舌画像データベースによる標準化舌診自己学習」

山口大学医学部附属病院 漢方診療部 准教授 瀬川 誠

「医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証」

横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学研究室 准教授 伊藤 亜希

※パネリストは上記最終報告者

＜各10分＞
（敬称略）

2022年度 表彰者一覧

奨励賞

該当者なし

功労賞

「現代医療における漢方医学の必要性を提示し、卒前卒後の漢方医学教育を実践」

北里大学 名誉教授

東洋医学総合研究所 名誉所長 花輪 壽彦

一般研究

「医学生を対象にした随証治療による漢方処方選択の確立」

弘前大学医学部附属病院 皮膚科 診療講師 皆川 智子

「科学的エビデンスを取り入れた鍼灸に関わる医学教育の研究開発」

富山大学附属病院 医療情報・経営戦略部 教授(部長) 高岡 裕

「卒後漢方教育への漢方医学 eラーニング〈臨床応用編〉の導入」

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授 中田 佳延

「漢方医学への学習意欲向上プロセスの探索
～医学生の漢方教育× Long COVID プロジェクトを通して～」

岡山大学病院 総合内科・総合診療科 助教 徳増 一樹

「漢方医学に関する診療や教育支援のための証・方剤選択アプリケーションツール開発」

京都府立医科大学 総合医療医学教育学教室(総合診療科) 講師 丹羽 文俊

「教育 DXモデルとしての漢方医学教育に資する多職種連携教育」

新潟大学大学院医歯学総合研究科医学教育センター 准教授 河内 泉

グループ研究

「Virtual University of Kampo medicine (漢方版の放送大学) 構想と実証実験」

千葉大学医学部附属病院和漢診療科 診療教授 並木 隆雄

「撓骨脈波の定量的解析データに基づく脈診シミュレータの開発」

東北大学 加齢医学研究所 助教 山田 昭博

(敬称略)

北里大学における漢方医学教育の実際と課題

北里大学東洋医学総合研究所名誉所長・名誉教授 花輪 壽彦

北里研究所附属東洋医学総合研究所（一般社団法人）は1972年に初代所長・大塚敬節、二代所長矢数道明らを中心に創設され、2022年には50周年を迎えた。

研究所は早くから漢方の普及・定着のために「医学生のための夏期セミナー」を開き、毎年夏に意欲のある全国の医学部学生に漢方・鍼灸の医学教育を行ってきた。2022年には第42回目のセミナーを行った。

2008年法人統合により北里大学東洋医学総合研究所となって、北里大学医学部3年生に8コマ（1コマ80分）の系統講義を行っている。漢方・鍼灸の特質と実際について講義・実習・薬草園見学と「体験型学習」を中心にし、腹診などはビデオ講義と腹診人形を使った体験学習、鍼灸体験や漢方薬の試飲、薬草園の見学、症例検討会を行っている。症例検討会では、実際の患者さんの症例を提示し、現代医学と漢方医学の病気に対するアプローチや病態の捉え方の相違が分かるように工夫している。しかし近年は漢方薬の服薬や鍼灸体験を望まない学生が増えていて、時代の変化を感じる。

漢方医学教育は江戸時代から例えば江戸医学館の『百日教育』に代表されるように基礎教育として、四書五経を教え、素問靈樞、難経、傷寒論、金匱要略、本草綱目などの講義と演習が行われ、筆記試験と口頭試問も行われていた。全国の各藩でもそれぞれ工夫された教育システムがあった。

明治政府の西洋医学に基づく医学教育制度によって、漢方は衰退したが、1970年代以降、疾病構造の変化などから伝統医学が見直され、コアカリキュラムの中に漢方医学教育が取り入れられ今日に至っている。

漢方薬は「普及」したが全国共通の医学教育がなされておらず、医師国家試験に出題されていない、生薬やエキス製剤の安定供給、「証」に基づく個別医療の軽視など、漢方医学の「定着」のための教育は喫緊の課題となっている。

略 歴

- 1980年 浜松医科大学卒業。浜松医大第一内科にて研修。
- 1982年 北里研究所東洋医学総合研究所に勤務。
- 1996年 同所長（～2015年6月まで）
- 2001年 北里大学大学院医療系研究科・東洋医学指導教授を兼務。
- 2008年 研究所と大学の法人合併により、北里大学東洋医学総合研究所所長、および同大学院教授（東洋医学）
- 2014年 北里大学医学部 医学教育研究開発センター・東洋医学教育研究部門教授。
北里大学大学院医療系研究科 臨床医科学群・東洋医学教授
- 2018年 北里大学東洋医学総合研究所名誉所長、北里大学名誉教授 現在に至る。

対外的には、日本東洋医学会理事、副会長、監事。和漢医薬学会理事、監事。東亜医学協会理事長などを歴任してきた。

卒前教育におけるICT活用の在り方

座長：

日本漢方医学教育振興財団 理事
日本漢方医学教育振興財団 理事

北村 聖
瀬尾 宏美
(選考委員会・委員長)

パネリスト：

富山大学学術研究部医学系成人看護学I講座 准教授
大分大学医学部 医学教育センター 教授
杏林大学医学部 薬理学教室 教授
旭川医科大学産婦人科学講座 教授
大阪医科薬科大学医学教育センター 講師(副センター長)
岩手医科大学医学部医学教育学講座 医学教育学分野 特任講師
横浜薬科大学 漢方薬学科 漢方治療学研究室 准教授

山田 理絵
中川 幹子
櫻井 裕之
加藤 育民
駒澤 伸泰
相澤 純
伊藤 亜希
(順不同・敬称略)

初期研修医に対する漢方教育の在り方

座長:

日本漢方医学教育振興財団 理事

日本漢方医学教育振興財団 理事

渡辺 毅

柴原 直利

(選考委員会・委員)

パネリスト:

横浜市立大学医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学 准教授

筑波大学 医学医療系 教授

近畿大学 東洋医学研究所 所長・教授

広島大学病院 漢方診療センター 教授

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授

山口大学医学部附属病院 漢方診療部 准教授

石上 友章

前野 哲博

武田 卓

小川 恵子

新井 信

野上 達也

瀬川 誠

(順不同・敬称略)

教材・e-learning推進事業の紹介

座長：日本漢方医学教育振興財団 常務理事 三瀨 忠道
(教材委員会・委員長)

日本漢方医学教育振興財団 教材委員会・委員 新井 信

横浜市立大学初期研修医を対象にした、漢方e-learningの活用による、漢方・東洋医学の教育効果・有効性の検討

公立大学法人横浜市立大学 石上 友章

1986年6月2日	横浜市立大学医学部付属病院臨床研修医
1988年6月2日	横浜通信病院第二内科
1989年6月2日	北里研究所附属東洋医学総合研究所
1991年4月1日	横浜通信病院第二内科
1994年4月1日	横浜市立大学医学部内科学第二講座
2000年2月1日	米国ユタ州エクルズ人類遺伝学研究所 JMLalouel研究室
2003年2月1日	横浜市立大学医学部助手(～2004年) 講師(～2005年) 准教授(2005年～)
現在に至る	横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学准教授

【背景】日本の漢方・東洋医学の蹉跌は、明治維新にまで遡る必要がある。明治新政府の政策により、日本の近代医学教育に、漢方・東洋医学は採用されなかった。2001(平成13)年の医学教育モデル・コアカリキュラムにおいて、『和漢薬を概説できる』(基本的診療知識・薬物治療の基本原則)の一文が採用されるまで、実に100年以上の教育的空白が生ずることになった。漢方・東洋医学を、日本独自の医学として継承し、医療として活用する機会を回復し、その価値を発揮する目的達成にあたっての課題は、『卒前・卒後教育の標準化』、『現代医療化』、『国際化』にある。本研究は、『卒後教育の標準化』を実現するうえで、慢性的な漢方・東洋医学の教育資源の枯渇という環境下で、漢方 E-Learning教材の価値を検証する目的で計画した。

【方法】2021年採用の横浜市立大学附属病院初期研修医(1年次33名、2年次38名)を対象に、2021年4月に漢方 E-LearningのID/PWを付与した。登録した研修医は、登録時にアンケート調査・臨床実力問題(14問)に回答したのち、一年間自由に閲覧・ログイン可能とした。登録者の、ログイン回数・視聴時間をデータ化した。一年後に、臨床実力問題に回答してもらい、前後の正答率を比較検討した。

【結果】17名(25%)の研修医の登録が得られた。一年間の、平均ログイン回数は8.47回、メジアンは6回で、平均視聴時間は17分5秒で、メジアンは27秒であった。登録者3名が、1時間以上の視聴時間の実績があり、平均は1時間24分53秒であった。臨床実力問題の正答率は、事前33.2%に対して、事後46.2%で、有意に正答率が上昇していた。(p=0.046)1時間以上視聴した3名に限って解析すると、正答率の変化は、28.5%→100%、21.4%→50%と2名で顕著な改善が認められた。

【結論】初期研修医に対する、漢方・東洋医学の卒後教育において、E-Learning教材は、有用である。

専門医の経験知に基づくVR漢方医学的診察教材の開発と検証

富山大学学術研究部医学系成人看護学I講座 准教授 山田 理絵

1997年 富山医科薬科大学卒業後、看護師として勤務。
2008年 金沢大学大学院終了後、教育、研究に従事。
2018年 富山大学学術研究部医学系成人看護学Iに着任し、現在に至る。

【目的】本研究の目的は、専門医の経験知に基づく診察方法を定量化し、医学生のためのVR漢方医学的診察教材を開発し、その検証を行うことである。

【方法】五感のうち視覚から得られる情報は約8割である。そこで、専門医の視線行動に着目し、視線計測装置を装着した9名の漢方専門医が、それぞれ個別に1名の模擬患者（SP）を診察する際の視線行動と会話内容を記録した。分析の結果、専門医がSPの目や顔を注視する回数および時間とSPの発話量に関連がみられた。これらの結果を基に、シナリオを作成しVR教材を開発した。

VR教材の検証にあたり、OSCE前の医学部4年生9名を（男性2名、女性7名）を無作為に割り付けた。まず、両群の学生は約10分間OSCE医療面接動画を視聴した。次に、介入群（ $n=5$ ）はVRゴーグル（約500g）を装着し、約20分間VR漢方医学的診察教材を視聴し、対照群（ $n=4$ ）は約20分間漢方専門医によるDVD教材（和漢医薬学の基礎知識：医学映像教育センター）による講義を受講した。その後、両群はそれぞれ個別に1名のSPの漢方医学的診察を行い、専門医が全32項目の自作チェックリストを用いて「実施できた」「実施できなかった」で評価した。カイ二乗検定を用いて検定を行い、統計ソフトは、SPSS Ver.27 for Windowsを用いて、有意水準は5%とした。本研究は倫理審査委員会の承認を得て実施した（研究番号R2021073）。

【結果】「両側の橈骨動脈に触れ、左右差がないか確認する」という1項目で「実施できた」学生数が介入群より対照群の方が有意に多かった（ $p<0.05$ ）。その他31項目で2群間に有意な差はみられなかった。模擬診察後に介入群の医学生より、初めてのVRに感動した、VRのゴーグルが重く首が痛かった等の意見が聞かれた。

【考察】初めてのVRへの感動が大きく、またVRゴーグルを約20分間装着することで生じた頸部への負担に意識が向き、診察の手順・知識の定着に繋がらなかったと考えられる。今後は、VR教材の内容、時間を見直すことが課題である。

症候別アルゴリズムを用いた漢方医学教育ツールの開発

筑波大学医学医療系 地域医療教育学 教授 前野 哲博

1991年 筑波大学医学専門学群 卒業
1991年 河北総合病院内科研修医
1994年 筑波大学附属病院 総合医コース レジデント
1998年 筑波メディカルセンター病院 総合診療科
2000年 筑波大学 卒後臨床研修部 講師
2003年 同 助教授
2009年 筑波大学 地域医療教育学 教授
現在 筑波大学附属病院 副病院長、総合診療科長
日本プライマリ・ケア連合学会副理事長

【背景】漢方医学の初学者が、忙しい臨床の合間に短時間で適切な方剤選択にたどり着くのは難しい。そこで今回、短時間でファーストチョイスの方剤を絞り込むことができ、かつ、学びを深めることのできるツールを開発し、その教育効果の検証を行った。

【方法】日常よく遭遇する14の症候・病態に対する方剤選択アルゴリズムを開発した。入力項目は、初学者でも使用しやすいよう、難解な証の用語を避けて、症候、年齢、性別、体力（丈夫・普通・虚弱）および症候別に方剤の選択に有用な質問（症候ごとに3問以内）とした。

開発したアルゴリズムを実装し、パソコン、スマートフォンなどで利用できるアプリ「漢方薬選択ガイド」を開発した。アプリでは、選択した方剤の特徴や構成生薬、添付文書などの情報を、その場ですぐに確認できるようにして、学習ツールとしても利用できるよう配慮した。各種メーリングリストや SNSなどを通して、本研究に協力するモニターを広く募集した。あわせて、利用開始3か月後にその教育効果を評価する web アンケート調査を行った。質問項目は、アプリの有用性や教育効果などについて、「強くそう思う」～「全くそう思わない」などの4段階のスケールで回答を求める形式とした。

【結果】モニターには134名の応募があり、webアンケート調査の回答者は38名（回収率28.4%）であった。アンケート調査の結果では「臨床業務に役立った」71.1%、「今まであまり使っていなかった処方薬を処方することがあった」50.0%、「漢方薬の処方決定するまでの時間を短縮できた」58.9%、「漢方薬に関する新たな知識を得ることができた」76.3%、「自信をもって漢方薬の処方が行えるようになった」61.7%、「今後も使用したい」81.6%、「プライマリ・ケアにおける漢方医療の充実に役立つ」78.9%であった。

【結論】本研究で開発したアプリは、診療だけではなく、教育ツールとしても有用であることが示唆された。

女性ヘルスケアを対象とした漢方卒後教育カリキュラム作成

近畿大学 東洋医学研究所 所長・教授 武田 卓

【学歴】

1987年 大阪大学医学部卒業
1995年 大阪大学医学部大学院博士課程修了

【職歴】

1997年 大阪大学医学部産婦人科助手
1998年 大阪府立母子保健総合医療センター産科診療主任・医長
2001年 大阪大学医学部産婦人科助手
2004年 大阪府立成人病センター婦人科副部長
2007年 大阪大学医学部産婦人科助教(学内講師)
2008年 東北大学医学部先進漢方治療医学講座准教授
2012年 近畿大学東洋医学研究所所長教授、東北大学産婦人科客員教授兼任

【目的】女性には月経・妊娠・閉経といった、劇的な内分泌的变化をとげ、男性より心身の不調が多い。更年期障害や月経関連疾患が代表疾患であり、女性のパフォーマンスに多大な影響を及ぼし、女性活躍促進における大きな課題である。しかしながら、治療薬であるホルモン製剤の特殊性から一般家庭医での対応は不十分であり、さらに一般女性のこれら薬剤の受け入れも不良である。そもそも女性特有の疾患に対しては、古来より漢方治療が汎用されており、漢方薬は臨床各科で容易に処方可能であることから、現状打開の有効な手段として期待できる。そこで、必修化された産婦人科臨床研修制度を利用し、女性ヘルスケアを対象とした漢方卒後教育カリキュラム作成を目的とした。

【対象・方法】最初に診療ガイドライン等を参考に重要処方18処方を選定した。この中で、①「産婦人科漢方治療の講義で、教えるべき薬剤」と②「女性ヘルスケア分野で教えるべき薬剤」を選択するアンケート調査を臨床研修指定病院16病院の産婦人科医123名を対象に実施し、カリキュラムを作成した。これをもとに40～50分の講義を想定した教育用スライドを作成し、5病院78名の初期研修医を対象に各施設で教育を実施し、教育前後の確認テストによる教育効果を検証した。

【成績】処方選定では、有効回答42例を解析し、初期研修医対象であることを考慮し、②の汎用上位処方から当帰芍薬散、加味逍遙散、桂枝茯苓丸、抑肝散、葛根湯、芍薬甘草湯、加味帰脾湯を選定した。教育前後の確認テストでは、有意な漢方知識向上を認めた($P < .0001$ 、Wilcoxonの符号付順位検定)。研修医の評価としては、「難易度」「時間」「話の流れ」の全てにおいて、概ね良好であった。

【結論】女性ヘルスケアを対象とした漢方卒後教育として、研修医が習得すべき7処方を選定した。教育スライドを作成し、教育効果を検証した。さらに、講義動画を作成し、ユーチューブで公開中である。

東洋医学サークル学生が主体となるアクティブラーニングを用いた漢方医学教育法の開発

大分大学医学部 医学教育センター 教授 中川 幹子

【学歴・職歴】

1981年 3月 熊本大学医学部卒
1981年 4月 熊本大学医学部 第2内科
1983年 11月 大分医科大学 内科第一
1992年 4月 大分医科大学 検査部 助手
2014年 4月 大分大学医学部 循環器内科・臨床検査診断学 診療教授
2015年 4月 大分大学医学部 医学教育センター 教授
スキルスラボセンター長
卒後臨床研修センター副センター長

【背景】大分大学には東洋医学を学ぶ学生のサークルである東洋医学研究会（以下 東医研）が存在し、活発に活動している。医学部における東洋医学の授業は、医師、薬剤師、鍼灸師らによって実施されることが多く、学生自身が授業を担当する機会はほとんどない。また、本学の東洋医学講義の中で「中医学」の授業は行っていない。

【目的】4年次生対象の東洋医学の授業を東医研に所属する学生に企画担当させ、「中医学」の授業を新たに構築する。授業前後で学生アンケートを実施し、学生自身が担当する教育の効果について検討する。

【方法】2021年度（zoomを用いたオンライン授業）と2022年度（対面授業）の東洋医学講義の1コマ（60分）を東医研所属の学生が担当した。独自に作成したテキストを用い、「中医学」の基礎理論について説明しながら症例検討を行い、基礎理論の応用の仕方や弁証の立て方を紹介した。また GoogleフォームやZoomのブレイクアウトルーム機能を活用した。東医研OGの医師も講義や鍼灸体験実習に参加した。授業前後に受講生に対してアンケートを実施した。

【結果】中医学に対する興味、将来の学修意欲や臨床使用への期待などの項目は、授業後に上昇した。また、学生が授業を担当するメリットとして「学生目線の授業で分かりやすかった」「刺激をもらった」「参加型で双方向的な授業が楽しかった」「質問しやすかった」など、多くの好意的な意見が寄せられた。デメリットとして「担当学生の負担」「臨床経験不足」への懸念が挙げられた。

【考察】東医研の学生がICTを取り入れたアクティブラーニングを用いて「中医学」の授業を実施し、高い教育効果が得られた。ただし、学生の臨床経験不足を補うため、教員のサポートは必要である。また、教員も積極的にICTを授業に活用する必要があると考える。

臨床研修医コミュニケーション能力に対する漢方医学研修の効果

広島大学病院 漢方診療センター 教授・センター長 小川 恵子

愛知県名古屋市生まれ

平成9年 名古屋大学医学部卒業、名古屋第一赤十字病院にて外科研修
平成14年 名古屋大学医学部小児外科 非常勤医員
平成16年 名古屋第二赤十字病院 小児外科常勤医
平成17年 あいち小児保健医療総合センター 医長
平成18年 あきば伝統医学クリニック 常勤医
平成19年 千葉大学医学部附属病院和漢診療科 医員
平成23年 金沢大学附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科 和漢診療外来 特任准教授
平成27年 同 漢方医学科 臨床教授
令和3年 広島大学病院 総合内科・総合診療科 漢方診療センター 特任教授
令和4年 広島大学病院 漢方診療センター 教授

漢方医学的概念を学ぶことによって現代医学とは異なった視点で患者さんを理解できる。漢方医学的診察では、望診で顔色や動作から、聞診で声の大きさや質などから、病態を推察する。問診では傾聴を重視し、切診では診察と同時に非言語的コミュニケーションを図る。以上より、漢方医学臨床実習によって、対人関係構築能力が向上し、コミュニケーション能力が向上すると経験的に言われているが、検証は十分でない。そこで本研究では、漢方医学研修が初期臨床研修医のコミュニケーション能力に及ぼす影響を検討するために、漢方臨床実習した初期研修医を対象に、研修前後に、臨床技術や患者の満足度、自律神経の測定を行い、比較検討を行った。

新型コロナウイルスの影響があったため、研修医の受け入れに難航したものの、2019年度から、2021年度にかけて研修医7名を対象に漢方医学臨床実習を実施した。まず4名の評価を行ったが、接触式の機器を用いて評価を行ったため、装着によるストレスにより、客観的な評価が難しかった。そこで、非接触で顔の動画を撮影することによる自律神経の測定方法を開発した。開発後に3名の測定を行ったところ、客観的な指標として問題ないと推察された。また、研修医自己評価アンケート・指導医による評価の結果患者満足度調査の結果は全例で研修前よりも研修後のほうがスコアが高かった。

非接触で自律神経測定を行うことによって、研修医の診察におけるストレスを計測することができた。今後は、より多くの研修医に対し客観的な評価を行うことで、研修内容の評価などに反映させたい。

漢方薬の薬理学的特性を理解するための学生実習の構築

杏林大学医学部 薬理学教室 教授 櫻井 裕之

1986年3月 : 東京大学医学部医学科卒業
1986年4月-1988年3月 : 聖路加国際病院内科研修医
1988年4月-1990年3月 : 虎の門病院腎センター医員
1990年4月-1992年6月 : 東京大学医学部付属病院第三内科医員
1992年7月-1995年6月 : ベス・イスラエルメディカルセンター(ニューヨーク)内科研修医
1995年7月-1999年6月 : ハーバード大学医学部・ブリガムアンドウィメンズ病院腎臓内科フェロー
1999年7月-2005年6月 : カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部内科腎高血圧部門研究員(Assistant Project Scientist)
2005年7月-2007年11月 : カリフォルニア大学サンディエゴ校医学部内科腎高血圧部門研究員(Associate Project Scientist)
2007年12月-現在 : 杏林大学医学部薬理学教室教授
2011年4月-現在 : 早稲田大学人間科学学術院非常勤講師

漢方薬の処方経験のある医師の割合は約80%と言われ、実地臨床における漢方薬の有用性についての認識は広まっているものの、西洋医学中心の医学教育において、医学生は漢方薬の効果はその薬理効果に基づくものではなく、プラセボ効果や科学で説明のつかない神秘的なものと捉えるものもいる。そこで、本研究では西洋薬の生体組織に対する定量的な評価を実地に行う薬理学実習に漢方薬を使用し、学生自らの体験として漢方薬の薬効が西洋薬のそれと同等に考えられるということを実体験させることを目的とした。

モルモット腸管平滑筋のアセチルコリンによる腸管強縮に対して芍薬甘草湯エキスを投与し、その用量反応曲線の変化から阻害様式を考察させた。芍薬甘草湯がアセチルコリンによる腸管収縮を非競合的に阻害することから、この薬物の腹痛への有効性が説明できた。さらに、この系で大建中湯エキスの投与によりアセチルコリンの強縮の50%ほどの腸管収縮と蠕動が観察され。この薬物が腹部手術後の腸管運動の促進目的で使用されることへの理解が得られた。

ラット横隔神経の電気刺激により横隔膜筋の収縮を評価する実験系では、強縮させた横隔膜筋が芍薬甘草湯の投与により収縮が阻害されることが観察され、この薬物が筋肉のこむらがえりに投与されることについて理解が得られた。

このように、西洋薬を使用した薬理学実習で、実習プロトコルを大きく変更することなく市販のエキス製剤を緩衝液に溶いて投与することにより、西洋薬の薬効評価の仕組みに漢方薬も適用することができ、西洋薬と対比してその薬効を評価することができた。実習前のアンケートでは漢方薬に西洋薬と同様の薬理作用があると考えたものの78%であったが、実習後では99%となり、所期の目的は達成されたと考えている。

病院間連携による卒後漢方教育へのe-learningの導入

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 教授 新井 信

1958年 埼玉県秩父市生まれ
1977年 埼玉県立熊谷高等学校卒業
1981年 東北大学薬学部卒業
1988年 新潟大学医学部卒業
東京女子医科大学消化器内科
1992年 東京女子医科大学附属東洋医学研究所助手
1994年 同 医局長
2005年 東海大学医学部ツムラ東洋医学寄付講座助教授(特任)
2007年 同 准教授
2013年 東海大学医学部内科学系准教授(専任)
2015年 同 専門診療学系漢方医学准教授
2017年 同 専門診療学系漢方医学教授(現職)

【目的】漢方医学教育は、教員不足に加え、医学教育改革や働き方改革による時間的制約も大きい。そこで、本研究は1回あたりの学習時間が短く、繰り返し学習が可能な漢方医学教育システムを開発し、評価することを目的とした。

【方法】本 eラーニングは、漢方初学者が学ぶべき基本10処方(補中益気湯、半夏厚朴湯、加味逍遙散、五苓散、抑肝散、六君子湯、大建中湯、大黄甘草湯、八味地黄丸、葛根湯)およびその関連処方と、漢方薬の上手な使い方と副作用、漢方の基本概念の全12レッスンから構成される。各レッスンには約12分間のナレーション付き解説と確認問題が含まれる。続いて、総合臨床問題10問すべてに正解すると修了証が発行される。本 eラーニングの教育効果と有用性を評価するため、12レッスン受講前後で、予めプールした10問の臨床問題からそれぞれランダムに出題した5問に対する得点と、漢方への興味、漢方の必要性、漢方薬の使用理解度、eラーニングの有用性の認識に関する4つの設問への回答を比較検討した。対象は新型コロナウイルス感染症の影響で多施設での実施が難しくなったため、東海大学医学部3年生に変更した。受講期間は2022年9月15日から29日までで、必修授業として実施した。なお、本研究は東海大学臨床研究審査委員会で承認されている(21R-039)。

【結果】対象とした119名全員が受講した。受講前後で、興味と必要性(いずれも $p < 0.05$)、使用理解度($p < 0.01$)は有意に向上したが、有用性の認識には変化がなかった。得点(5点満点)は2.08から2.92へと有意に上昇した($p < 0.01$)。

【考察】本研究では修了率が100%で、受講前後の得点が有意に上昇したことから、その有用性が証明できた。本 eラーニングはアクティブラーニングへの導入、卒後教育への応用など、漢方医学教育に広く応用できる可能性がある。

【結語】漢方医学 eラーニングは教員不足と時間的制約が大きい漢方卒前教育に導入する価値がある。

バーチャルリアリティ技術を応用した腹診学習コンテンツの作成と実践

東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授 野上 達也

1973年6月 神奈川県横浜市瀬谷区に生まれる。
1992年3月 神奈川県立厚木高校卒業
1998年3月 富山医科薬科大学卒業
1998年4月 富山医科薬科大学附属病院和漢診療部 入局
1999年4月 鹿島労災病院にて内科・漢方医学の研修
2003年4月 麻生飯塚病院漢方診療科にて漢方医学研修
2010年3月 富山大学大学院医学研究科(博士課程)修了
2010年4月 富山大学附属病院助教・病棟医長
2012年4月 富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座助教・病棟医長
2014年4月 富山大学附属病院診療講師兼任
2020年4月 東海大学医学部専門診療学系漢方医学 准教授

漢方医学を学ぶ上で腹診を習得することは非常に重要である。これまで学生や研修医などの初学者が腹診を学習する方法として、実際の診療での陪席や、腹診シミュレータを用いた方法などが行われてきたが、今回我々は、近年発達の著しいバーチャルリアリティ（VR）の技術を腹診教育に応用することを計画した。仮想現実空間の中で模擬患者の腹診を学習できるコンテンツを作成し、それを実際に学生や研修医の教育に実践し、その効果や問題点を明らかにすることが本研究の目的である。

本研究においてはGeo Magic Touchを含むVR触覚システムを導入し、東海大学情報通信学部情報メディア学科の濱本和彦教授の協力の元、VR腹診シミュレータの開発を行っている。VR腹診シミュレータ version1は2022年3月に完成したが、いくつかの問題があり実際に教育に応用できる品質に達していないと判断し、現在 version2として修正・再開発中である。今後、version2の品質を評価し、十分な物であれば2023年度の医学教育において用いる予定である。また、本研究は漢方医学的腹診所見のみならず、現代西洋医学的な腹部所見をも再現できるシステムへの発展を視野にいれており、幅広い応用が見込まれる。

また我々は、触診センサー（Digi Tacts センサシステム）を用いた漢方医学的診察の客観化も行っている。漢方専門医の診察所見を数値化することは腹診教育に有用であるのみならず、専門医の診療を単に画像としてでない貴重なデータとして集積できる。

本研究の延長線上には、単に「腹診」をVR上で体感するだけではなく、腹診以外の切診や画像コンテンツを利用した望診、チャットボットを応用した問診なども含めて、一連の漢方医学的診察をVR上で行うことができるシステムの開発を想定している。研究開発はコロナ禍の影響もあり当初の予定よりやや遅れているが、活動を継続するために必要な備品は助成により十分に準備できており、今後も研究を継続し、当初の研究目的を達成したい。

クラウド型教育支援サービスによる均一化された漢方教育の拡充

旭川医科大学産婦人科学講座 教授 加藤 育民

1992年 旭川医科大学卒業、旭川医科大学産婦人科入局
1993年 旭川赤十字病院産婦人科
1994年 国立札幌病院産婦人科
1995年 釧路労災病院産婦人科
1998年 旭川医科大学産婦人科 医員
2002年 旭川医科大学医学博士
2003年 アメリカ国立衛生研究所:NIH留学Postdoctoral Fellow(～2006年)
2006年 旭川医科大学産婦人科助教
2012年 旭川医科大学産婦人科講座 周産母子センター講師
2020年6月～現在に至る 旭川医科大学産婦人科講座 教授、感染制御部部长
2021年7月～2022年3月 旭川医科大学 副学長
2021年7月～現在に至る 旭川医科大学病院 病院長補佐

本学では、医学概論カリキュラム内(医学部3年生)で、必修8コマの漢方授業時間(6コマの講義と2コマの実習)を確保している。以前は、学内での講師確保が難しく、学外講師に多く依存していた。現在は、学内において日本東洋医学学会専門医2名、漢方に精通している先生方が増えたこともあり、講師確保の労力が減っている。しかし、多くの科に依存していることから、時間調整が難しく、学外講師にも依存しているのが現状である。学外講師の選定において、時間以外に各講師料や交通費を含めた面も考慮が必要である。このような状況から、漢方教育の拡充の対策を模索していた。その対策として、クラウド型医学教育の導入、学生の興味を引き出す講義構築(シミュレーターを用いた実習内容の充実等)、漢方関連研修セミナー実施、学生サークル活動を後押しなどが必要と考えた。この対策実行のため、本助成を申請し受諾いただいた経緯がある。受諾後、コロナ感染症が流行し、その影響は計り知れないが、今回の目的の1つである漢方教育内にクラウドサービスが醸造された。本助成を利用し、クラウドサービスを活用しながら、遠隔対応(人材の確保等)にも繋がっている。2021年度は、実習に利用する腹部診察シミュレータ1台(女性・虚証モデル)を購入し、漢方講義の重要性、腹診シミュレータの有用性を啓発目的に2名の御高名な先生による講演会を開催(WEB)した。2022年度は、シミュレータ2台(女性・中間証モデル、女性・実証モデル)を購入し、講義担当者に日本漢方医学教育協議会編纂「基本がわかる漢方医学講義」テキストを購入配布し、教育内容の均一化を図った。また、本学部活動である漢方研究会への支援のためテキストの作成援助、活動報告の会議参加支援を継続し、本学における漢方医学への拡大に繋がっている。本学の活動報告と共に、均一化された漢方教育の拡充に向けた考えをお話したい。

漢方医学に対する多職種連携教育システムの構築

大阪医科薬科大学医学部医学教育センター 副センター長・講師 駒澤 伸泰

2006年 大阪大学医学部卒業。宝塚市立病院、兵庫医科大学、兵庫県立がんセンターなどで研修。
2013年 大阪医科大学附属病院医療技術シミュレーション室副室長（同・麻酔科学教室助教）。
2015年 ハワイ大学医学部シミュレーションセンター（SimTiki）留学。
2019年 大阪医科大学（2021年から大阪医科薬科大学）医学部医学教育センター・副センター長・講師

漢方薬処方において、西洋医薬との併用、食事内容との相互作用、内服時の生活注意点など多視点からの注意が必要である。ゆえに、効果的かつ安全な薬剤医療安全には、医師・薬剤師・看護師を始めとする多職種協働が必須である。漢方医学の多職種協働が期待されているが、必ずしも円滑には進んでいない。

漢方薬は西洋薬と併用して処方されることも多く、効果と安全性、危機管理に関する網羅的教育を Problem-based learning and discussion やシミュレーターを用いて構築した。初学年から最終学年に至る段階的な漢方医学多職種連携教育システム構築と全国的な普及を目指した。

第一段階として、国内外の漢方薬処方時における医学・薬学・看護の視点からの問題抽出を行った。そして漢方医学における多職種連携課題の課題を明確化し、それぞれの漢方製剤や処方状況（慢性期・急性期）における連携対応を漢方薬医療安全と漢方薬医療倫理の「学習シナリオ」として開発した。

第二段階として、学習シナリオの教育試行を行った。漢方薬医療倫理は、6月10日に医薬看護合同500名で施行し、漢方薬医療安全は300名で施行した。教育内容施行後、医学生、薬学生、看護学生からフィードバックを得た。現在は、テキストマイニング法を用いて3学部学生の漢方多職種連携に関する学びを解析している。さらに、新型コロナウイルスパンデミックにより、集合型 PBL が不可能となったことなどから遠隔形式、バーチャルリアリティ併用などの学修形式を模索している。

医学部学生用動画教材の作製とそれを用いた多学部合同実習の設計

岩手医科大学医学部医学教育学講座 医学教育学分野 特任講師 相澤 純

昭和39年12月 岩手県遠野市にて出生。
平成3年 岩手医科大学 医学部 卒業
平成4年 岩手医科大学医学部麻酔学講座入局 研修医→助手～助教
平成26年1月 岩手医科大学医学部医学教育学講座に移動（麻酔科は兼任）助教
平成29年4月 同 特任講師

もともと本研究は、初年度に本学出身で東京在住の漢方専門医に依頼して漢方医学に関する動画教材を作成し、その後医学部、歯学部、薬学部、看護学部の各学部有志学生に対して多職種連携トレーニングを行って、動画の教育効果の検証と必要に応じた改善を行うものとして計画された。しかし、新型コロナウイルスの流行により、計画は大きく遅延することとなった。スライド自体は比較的早期に完成していたものの、新型コロナウイルスの東京、盛岡における時間差を伴う流行により、東京のスタジオにて計画していた音声収録の目処がつかなくなったのである。その一方、新型コロナウイルスの岩手県での流行によって学生の学外施設での実習が中止となり、代替プログラムの作成が必要になったため、急遽漢方の基礎に関する動画を別途作成して、医学部の1年生に使用して講義を行った。動画は、日本漢方医学教育協議会が作成したテキストに準拠した内容で作成した。その動画閲覧後にレポートを提出させたところ、好意的な意見が学生から多く寄せられたため、翌年からこれも新型コロナウイルスの流行によって生じた心肺蘇生実習の空き時間を利用して、医学部1年生の正規のカリキュラムとして漢方医学教育の時間を確保することができた。

本来計画していた動画は、2年めの夏ようやく完成した。そこで、まず薬学部の教員にはたらきかけ、医学部と薬学部の学生による漢方医学のシミュレーショントレーニングを実施して、終了後のアンケートをもとに動画の修正を行った。今後、本来予定していた動画教材を完成させ、参加人数や学部を増やした多職種連携トレーニングを継続してゆきたい。また本学では、毎年春に4学部合同で、模擬症例に対する多職種連携教育が行われているが、その症例のひとつとして新規に漢方治療が奏功した症例を提案した。もしその症例が採択されたならば、学生たちの教育に今回作成した動画教材を使用する予定である。

Web投票を活用した舌画像データベースによる標準化舌診自己学習

山口大学医学部附属病院 漢方診療部 准教授 瀬川 誠

平成 8 年 山口大学医学部医学科卒業
平成 8 年 山口大学医学部第一内科学講座（消化器内科学）入局
平成 14 年 山口大学大学院医学研究科博士課程修了
平成 20 年 山口大学医学部附属病院第一内科 助教
平成 22 年 山口大学医学部地域医療推進学講座 講師
平成 25 年 山口大学医学部附属病院医療人育成センター 准教授
平成 28 年 山口大学医学部附属病院漢方診療部 准教授（現在に至る）

舌診は漢方医学の基本的診察手技であるが、その技術の習得は長期間の指導医の下での臨床訓練を要するため容易でない。また、標準的教育法も確立しておらず、効率的で標準化された現代的な学習システムの開発が求められている。

本研究では、複数の漢方専門医の診断に基づく信頼性と客観性の高い診断情報を紐づけた舌画像データベースを構築し、さらに、データベースの舌画像を用いた舌診テストを実装した WEB 上で自己学習可能な e-learning システムを作成し、舌診教育に活用し、その教育的有用性と実用性を検証した。

(1) 舌画像データベース構築：125 人分の舌画像を収集し、5 名の漢方専門医の独立した診断結果から多数決により最終診断を決定した。この手法により、診断者個人の主観的診断を信頼性と品質の担保された客観的診断データに変換し、舌画像データベースを構築し得た。(2) 舌診 e-learning システム構築：データベース中から 10 人分の教育用舌画像を抽出し、8 観点（舌の大きさ・色・歯痕・亀裂・乾湿、舌苔の色・厚さ・乾湿）を診断する舌診テスト問題 80 問を作成し、舌診 e-learning システムを作成した。(3) システムの検証：山口大学医学部医学科学生 112 名に対し、舌診教育実施後に、本システムを用いて舌診テストを受験してもらい、教育効果や舌診技術習得度を評価した。本研究の成果は論文で報告した。Segawa M, et al. Front Med Technol. 2021 Dec 22;3:760542.

本システムは、Web投票による診断データの蓄積により、舌画像の診断情報の精度を高めることが可能である。また、WEB上で時間や場所を選ばずに繰り返し学習でき、客観的に舌診能力を自己評価できる。本システムは、現代的な漢方舌診教育における標準的学習システムとして、大学での基礎教育や医師の生涯学習等での活用が期待できる。

医学生を対象とした漢方医学教育入門編の開発と検証

横浜薬科大学 漢方治療学研究室 准教授／神奈川県立産業技術総合研究所 非常勤研究員 伊藤 亜希

1990年3月 東京理科大学 薬学部 薬学科 卒業
1990年4月 塩野義製薬株式会社 中央研究所 入社
2000年4月 町立八丈病院 薬剤師
2002年10月 慶應義塾大学病院 薬剤師
2005年10月 青山薬局 薬剤師
2013年11月 神奈川科学技術アカデミー（現：神奈川県立産業技術総合研究所）特任研究員
2018年4月 慶應義塾大学 医学部 漢方医学センター 共同研究員（兼務）
2022年3月 東京理科大学大学院 薬学研究科 博士課程修了
2022年4月 横浜薬科大学 漢方治療学研究室 准教授

コロナ禍の経験を通じて世界中でOnline授業を余儀なくされ、そのメリットとデメリットが浮き彫りになり、さらに対面授業の重要性も認識された。今後はICT活用授業が主流になると考えられ、必要な知識を授業外にeラーニング等で習得し、実際の対面授業では発展的な内容に置き換える反転授業が効果的である。しかし一般的にデジタル世代の学生の不満として、eラーニングの質が挙げられている。本研究では学生目線を視野に入れた『漢方eラーニング入門編』を開発することを目的とした。

- 1) 全国82の医学部・医科大学中57大学（約70%）から協力が得られた。協力を得られた57人の協力学生にアンケートを実施した。学生は予備校が作成するeラーニングに効率性を感じており、倍速再生やテキストをダウンロードし書き込める環境が重要であるとしていた。また、漢方については理論から学ぶのは学習意欲が損なわれやすく、実際に臨床で使える知識を充実させ、漢方用語は絞らないと混乱を招き、注釈だらけの教材になると指摘していた。
- 2) 漢方を学習する意欲が持てない医学生に漢方の魅力を伝える動画の作成を募集したところ7人の学生から応募があり、題名『漢方薬を効かせる』では教員と学生の評価は共に1位であったが、他の作品については教育と学生の評価に乖離がみられた。
- 3) 4大学サークルが『漢方入門編』の構想案を作成し、協力学生に選ばれた構想案は1回15分の10回分であり、基礎知識を網羅しつつ症例に即した回があるところや鍼灸が組み込まれているところが評価されていた。

現在、漢方を学習する意欲が持てない医学生に漢方の魅力を伝える動画については、『導入編』として既に漢方eラーニング内で配信している。学生の選んだ『漢方入門編の構想案』に基づき、学生が好むスライドを意識した『漢方eラーニング入門編』を現在開発している。今後『漢方eラーニング入門編』の学習効果を検証する。

主催 日本漢方医学教育振興財団

後援 文部科学省 日本医師会 日本東洋医学会
日本プライマリ・ケア連合学会 日本病院総合診療医学会
日本漢方生薬製剤協会 神奈川県立産業技術総合研究所

協力 日経メディカル開発